

明治25(1892)年、駐在武官としてドイツに赴任していた日本陸軍の福島安正中佐は、帰国にあたって、陸路でシベリアを横断することにしました。2月11日、ベルリンを出発した福島中佐は、零下50度にもなる極寒のシベリアを単身騎馬で横断します。ウラジオストックに着いたのは翌26年6月12日のことでした。全行程1万4千km、1年4ヶ月をかけた大冒険旅行でした。

この旅行の目的は、ロシア帝国の軍勢力と、ロシアが建設中のシベリア鉄道の実態を調査することでした。シベリア鉄道が完成すれば、ロシアは極東アジアにこれまで以上に大きな軍勢力を展開することが可能になり、それは明治維新後日も浅い日本の独立を脅かすものであったからです。

この旅の中で福島中佐は当時国名すら消されていたポーランドの地を通過し、悲運の国の実状に胸を詰まらせ、シベリアに流されていたポーランドの愛国者たちの話に涙します。記録に残された福島中佐の言葉からは、終始ポーランドの人々に対する好意的な目線が感じられます。以下は、文語体で書かれた『単騎遠征録』の内、ポーランドに関して記述された一部を現代語に直したものです。(参考：<http://tankiensei.nomaki.jp/>)



■亡国山河

国は亡び去り、君主の地位は汚されて山河のみ空しく残り、一面の麦畑の上には冷たい風が吹き渡っている。中佐は波蘭のたどった無念の歴史を思うにつけ、馬を停めて感慨を禁ずることができなかった。波蘭の古都ワルシャワの市外に立ちつくし、当時の変乱の日を思い、惨憺たる有り様に心を痛め、もの寂しい景色に魂も消える思いである。…(中略)…ロシアに対して蜂起した者はその大部分がシベリアに流されたり財産と権利を没収されたりして、余命を細々とつないでいるに過ぎない。中佐は波蘭に入ってその実状を見るに及び、涙を流さずにはおれなかった。

■波蘭沿革

ああ、二百年前のポーランドは実に中央ヨーロッパ有数の大国として、北はバルト海から南は黒海に至る広大な領土を有し、国土面積はフランスやスペインに肩を並べるほどであった。当時、プロイセンはまだ統一王国ではなく、ロシアもまた小さな国が分立する地域に過ぎなかった。諸国の上に雄々しく君臨する唯一の国、それがポーランドであった。その国民は正義心と勇氣に溢れ、将兵は素晴らしく強かった。

諸国はそのようなポーランドに対し畏敬の念をもって接していたが、盛者必衰の理には逆えず、(気付いた時には)既に国の大本となる綱紀は緩み、役人の規律が崩れていた。国の指導者たちは政権の奪い合いで潰れてゆき、一般の国民は度重なる選挙の紛争に疲れて国民としての誇りや国を守る気概を失い、次第に国家としての基本的な形すら維持できなくなり、遂に国勢も衰えてしまった。優良な国民や精強な軍がありながら、政治と行政がそれらを上手く活かすことをしなかったのである。

ちょうどその頃、東にロシア西にプロイセンがにわかに勃興して、新しい強国と

して周辺の国々に強大な影響力を及ぼし、ポーランドもまたその勢いに飲み込まれていく。そして1772年には、プロイセン、オーストリア、ロシアの三国によって、国土の3分の1が奪い取られてしまったのである。…(中略)…心ある人々が武器を持って立ち上がり、侵略された国土を奪還しようと勇ましく戦ったけれども如何ともし難く、川を血に染め屍の山を築いただけであった。1795年、ついに抵抗運動は力尽き、国は焦土となって荒廃し、広大な国土は全て周辺三国によって奪い取られてしまった。

ああ、これは一体誰の罪なのであろうか。綱紀頹廢して国内は乱れ、対外的に重要な政策を疎かにした結果であろう。よくよく考えるべきことではないだろうか。ロシアの干渉は次第に大きくなり、ポーランドの愛国者たちも立ち上がってロシアと戦うも、大軍を相手に勝ち目はなく敗れ去った。1832年2月16日、ロシアは勅令によってポーランド王国の権利を全て剥奪し、完全にロシアのものとしてしまった。数万人の優れた将兵が(家族ととも)極寒のシベリアに流された。反乱に関与しなかった人々もまた自由を剥奪され、公用語としてロシア語を押しつけられてポーランド語を話すことを禁ぜられたのである。その悲惨な有り様は口にするのも耐えがたいほどである。

■露領十州

山河は空しく残り、波蘭のかつての栄華を偲ぶ遺構のみあちこちに散在している。ロシアにかすめ取られたポーランド領の十州は面積127,319km²、人口8,256,000人余である。その内1,134,000人余りがユダヤ人という。全ヨーロッパのユダヤ人6,500,000人余りの約半数はロシア領内にいるが、ポーランドにはその3分の1が住んでいる。



■波蘭懷古

十州の首都はワルシャワである。人口は約50万人であり、ペテルブルグ、モスクワに次ぐ大都会である。ヴィスワ川の両側に広がるワルシャワには五本の鉄道がつながり、街路は整然として家々が軒を連ね、人々は正義感にあふれる。世間ではワルシャワを小バリと称している。旧王宮は厳かで優雅な姿を遺し、ここを訪れる各国の旅行者は、かつての栄華をしのんで涙を流すという。



■波蘭富豪

タリツァ村は、あのポーランドの名士バクレスキー氏がロシアに対する抵抗運動に敗れて流罪となり、艱難辛苦の後に事業を興してついに莫大な富を築いた所であり、そのウオッカ製造所がまさにここにある。工場長もやはりポーランド人で、反乱に加わってシベリアに流され、その後赦免されたそうである。

■悲憤回顧

晚餐の招きを受けて工場長の家を訪れると、主人のバ氏がバリから戻っていて、中佐の手を握って歓待し、春のように和やかな雰囲気食卓を囲んで談笑して過ごしたが、バ氏が中佐のために特に反乱の時のことを話し出すと、一同は憤りと悲しみの感情を抑えることができなかった。中佐が聞くところによれば、反乱で捕らえられた囚人は、ポーランドからオムスクまで炎天下あるいは氷雪の上を10ヶ月間歩かされたという。その日、午後4時に退出して出発した。製造所の各役員及びその夫人や令嬢たちが、馬車や騎馬で駐車場の前まで見送り、中佐の姿が見えなくなるまでハンカチや帽子を振って、中佐の安全を祈って別れを告げたのであった。

